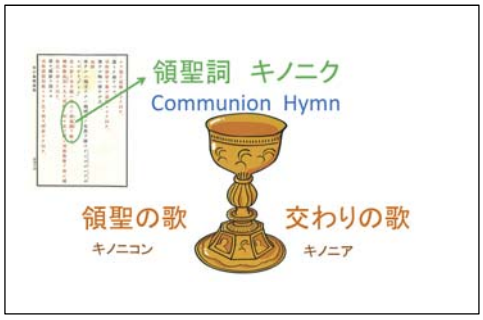
## 12　領聖の時に何を歌うか２　領聖詞

### 〔1〕表紙

前回に引き続き、領聖の歌をとりあげます。前回は、正教の奉神礼、とくに聖体礼儀、領聖を中心とした信仰生活のサイクル「準備して、成就を迎える」というサイクルから、その頂点である「領聖」の時に「どんな歌がふさわしいか」「ふさわしくないか」を考えました。

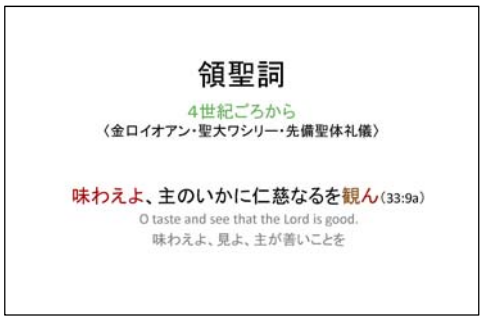
### 〔2〕領聖詞　キノニク、交わりの歌




今回は、その領聖の時に歌うと指定されている歌、領聖詞キノニクについて解説します。奉事経の 173 ページ、「聖なるは独り、主なるは独り」のあとに「本日あるいは聖人のキノニクを歌う」と書かれています。

キノニクの語源キノニアは「交わり、一致」を意味します。英語でキノニクは Communion Hymn、交わりの歌、一致の歌です。祭日や記念する内容によって 26 種類の領聖詞があります。領聖詞の詳しい歴史については、日をあらためて、理論編「正教聖歌の伝統」お名前シリーズで解説しますので、ここでは概説にとどめます。

### 〔3〕領聖詞は 4 世紀頃から

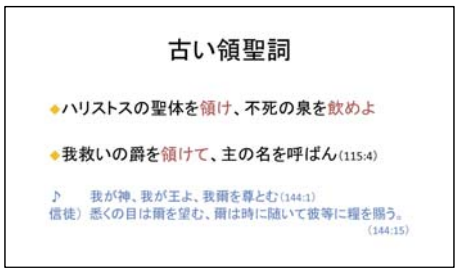



キノニクが歌われるようになったのは 4 世紀、キリスト教が認められ、教会の規模が大きくなってからです。それ以前は小さな集まりでしたから、黙って頂きました。

「最も古いキノニク」とされるのが 33 聖詠 9 節、「味わえよ、主のいかに仁慈なるを見ん」です。今は先備聖体礼儀の領聖詞として歌われていますが、かつては金ロイオアン、聖大ワシリー、先備聖体礼儀、すべての聖体礼儀の領聖詞でした。原文を直訳すると「味わいなさい。見なさい。主の善きことを」という意味になります。

9 世紀ぐらいまでは東方だけでなく西方でも、この領聖詞が広く用いられました。今の 26 の領聖詞では、祭日の内容や、祈りの目的に合わせたことばが選ばれているものもありますが、この最古の領聖詞では「味わえよ、見よ」ですから、「領聖しなさい」という命令、動作を促しています。古い領聖詞は、祭日や祈りの内容に合わせたというよりも、「味わえよ」「受けなさい」「飲みなさい」というように、領聖を促す命令のことばになっています。

### 〔4〕　古い領聖詞―動作を促す




古い領聖詞、たとえば、「ハリストスの聖体を受け、不死の泉を飲めよ」。これは、今では信徒領聖の時に歌われていますが、もともと復活祭の領聖詞です。生神女の祭日の領聖詞「我、救いの爵を受けて、主の名を呼ばん」。どちらも、「領け」ということばがあり、領聖を促

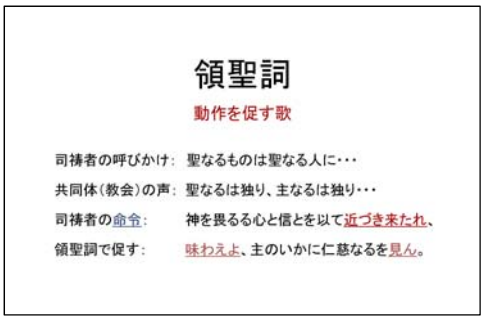
しています。

ひとつトリビア。みなさん食事の時の祈りとしてご存じの 144 聖詠 15 節「主や、衆人の目は、爾を望む、爾は時に随いて彼等に糧を賜う」は、金ロイオアンによると、144 聖詠の 1 節「我が神、我が王よ、我爾を尊む」とセットになって領聖詞として用いられていました。「天に在ます」もそうですが、領聖がふつうの食事と結びついている、奉神礼の延長線上に日常生活があるというのは正教会らしいですね。

### 〔5〕動作を促す

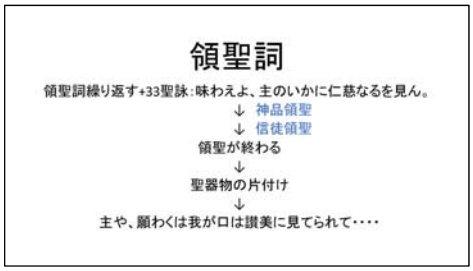
7 世紀頃の領聖前後の流れを見ましょう。司祷者が「聖なるものは聖なる人に」と呼びかけて、教会は「聖なるは一人、主なるは一人、イイスス・ハリストスなり、アミン」つまり「聖なるはイイスス・ハリストスだけだから、自分たちはふさわしくない」と答えます。

ところが、司祷者は重ねて「神を畏るる心と信とを以て近づき来たれ」、「来なさい」と命令し、さらに、領聖詞で「味わえよ･･･」と促します。



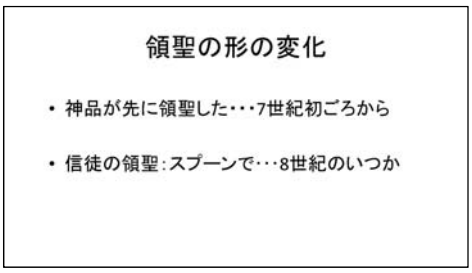

### 〔6〕領聖詞は神品、信徒の領聖が終わるまで

古い時代には神品の領聖から信徒が領聖するまで、ずっと同じ領聖詞が歌われました。領聖詞は短いので、簡単なメロディで歌い、ソロの聖歌者の歌う聖詠の句と交互に会衆が繰り返したと考えられています。聖詠と簡単なメロディの繰り返しというのは古代ビザンティン聖歌の定番です。7 世紀の記録では、神品と信徒の領聖が終わり、聖器物が片付けられるまで領聖詞が歌われ、歌い終わると「主や、願くは我が口は讃美に満てられて、我等爾の光栄を歌わん、･･･、「アリルイヤ」「アリルイヤ」「アリルイヤ」を歌うとあります。



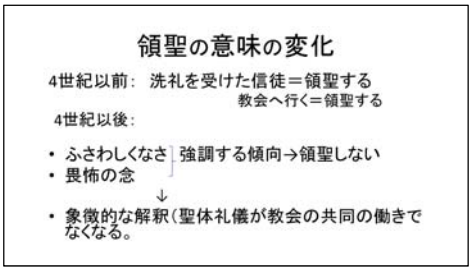

### 〔7〕領聖の形の変化

ちなみに、このころは神品、信徒の順で領聖していました。領聖のかたちは、信徒も神品と同じくご聖体を手で受けて頂いていました。信徒にスプーンでご聖体を与えるようになったのは 8 世紀頃とされます。




### 〔８〕領聖の意味の変化

前回も申し上げましたが、教会の伝統、というより教会の本質、本来のありかたを歪める根深い問題があります。



それは信徒が領聖をしなくなる傾向で、すでに 4 世紀ぐらいから始まっていました。キリスト教が国教になり、熱心ではない信徒の増加もありましたが、逆に敬虔さや畏れの念が強調されて「自分はふさわしくない」から、ご聖体を受けられないと自分で決めてしまうケースも多くなりました。歴史上、領聖を呼びかける揺り戻しは何度もありましたが、つい最近、数十年前まで続き、5、60 年前までは「ご聖体は年に 2 回受けましょう」と普通に言われていました。

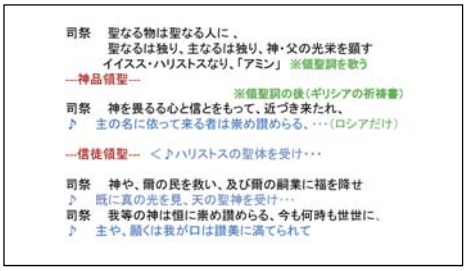
今は「ご聖体は年に 2 回受ければいい」と指導する神父さんはいませんが、聖体礼儀が、信徒がご聖体を受ける集まりでなくなったら、教会はハリストスの体を実現するという本来の目的を失います。聖体礼儀の説明も、「ハリストスの受難を象る」とか「復活の神の栄光を表す」などの「かたどり」が中心になり、極端なことを言えば、聖体礼儀の目的は「神と信徒が一致すること」ではなくなり、神品や聖歌隊などの奉神礼奉仕者は美しい儀式を提供することが務め、信徒は「見物する」人、享受する人になってしまいます。

**〔9〕信徒で領聖するものがあれば･･･**

これは『奉事経』の領聖準備のページですが、「もし、常人聖体を領けんと欲するあれば」（一般信徒で聖体を受けようというものがあれば）、と書いてあり、「受けないこと」が普通であったことがわかります。

1956 年の『浪華正教』に加藤直四郎先生が「聖歌の歌い方」という記事を連載されていますが、そこにも領聖する人が多くあれば、「ハリストスの聖体を受け」を歌うと書いてあり。信徒領聖者がいないのが普通だったことがわかります。神品領聖中にはイルモスなど、なにか適当な歌を歌い、信徒の領聖者があれば「ハリストスの聖体を受け」を歌うというスタイルができていました。

**〔10〕領聖前後の流れ**



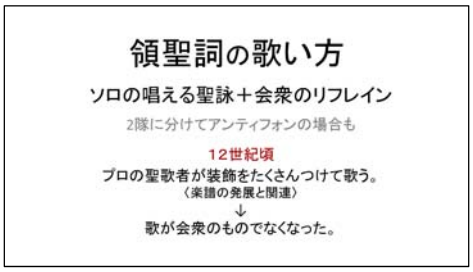

現在行われている領聖前後の流れを見ましょう。
司祭が「聖なる物は聖なる人に」、と呼びかけ、信徒あるいは聖歌隊が代表して「聖なるは独り、主なるは独り、神・父の光栄を顕すイイスス・ハリストスなり、アミン」と答えます。

奉事経にはここで「領聖詞を歌う」と書かれています。ロシアでは領聖詞をまっすぐに、ささっとに歌った後、誦経者が何か読んでいました。日本では適当な歌を歌って神品領聖の時間を埋めています。「イルモス」が歌われることが多いですが、内容から言って、領聖の時にはあまりふさわしいとは言えないという話は前回しました。神品領聖のあと、説教が行われることもあります。そして、王門が開いて、司祭「神を畏るる心と信とをもって、近づき来たれ」、と呼びかけられ、信徒は「主の名に依って来る者は崇め讃めらる、主は神なり、我等を照らせり」と歌って、領聖祝文、信徒領聖になります。ちなみに「主の名に依ってきたる者は」の歌はロシア系だけで、ギリシアの祈祷書は司祭の「神を畏るる心と・・」だけでした。ギリシアの祈祷書では領聖詞の後「神を畏るる心・・・」を歌うと書かれており、領聖詞は神品領聖中の歌と考えられているようです。

信徒領聖中はギリシア系もロシア系も「ハリストスの聖体を受け、不死の泉を飲めよ。」が歌われています。先ほどお話ししたように、7 世紀には神品領聖中も信徒領聖中も領聖詞が続けて歌われていました。次第に、信徒が領聖することが稀になり、領聖詞は「神品領聖中の歌」になっていったと考えられます。

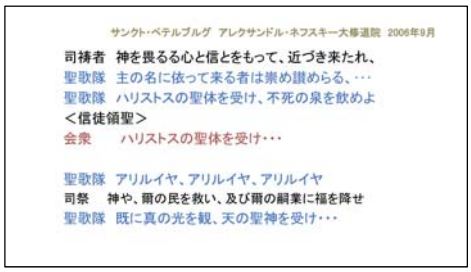
**〔11〕歌い方の変化**

さらに領聖詞の歌としての性格が大きく変化したのは 12 世紀ごろです。かつては会衆参加のシンプルな歌でしたが、プロの歌い手が、装飾をたくさんつけて歌うようになりました。会衆の歌うシンプルな祝いの歌は、プロの「聴かせる歌」になってゆきました。これも神品領聖の時の歌と信徒領聖の歌の分かれた原因の一つかもしれません。




**〔12〕「ハリストスの聖体を受け」会衆が歌う**

ロシアでは神品領聖中の領聖詞まで聖歌隊が歌い、信徒領聖のときの「ハリストスの聖体を受け」は会衆が歌のも多く見かけました。聴いてみましょうか。ペテルブルグのアレクサンドル・ネフスキー大修道院の聖体礼儀です。<<Sound SD_B¥005SP_Nevsky_lit03 信徒領聖.wav



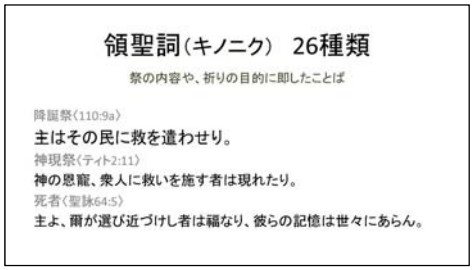

ハリストスの聖体を受け、不死の泉を飲めよ。（復活祭領聖詞）1 回目だけ聖歌隊が歌って、次からは信徒が歌います。終わると、聖歌隊がアリルイヤを歌って、「既に真の光」につなげます。信徒領聖の部分を「別もの」にしているとも考えられますが、信者さんは嬉しそうに歌っていたので、やっぱり参加するのは楽しいのだなと感じました。

**〔13〕26 の領聖詞**

話を 9 世紀に戻します。そのころまでに、今ある 26 個の領聖詞が出揃いました。この 26 のキノニクの一覧表はギリシアの研究者デミトリイ・コノモスによるものですが、日本で用いられているのは少し異なります。

**〔14〕祭の内容を表す領聖詞**

領聖に進む動きを促す古いタイプの領聖詞に加え、祭の内容、祈りの目的などに即したことばが選ばれています。たとえば降誕祭には 110 聖詠から「主はその民に救いを遣わせり」、神現祭にはティト書から「神の恩寵、衆人に救いを施す者は現れたり」、死者の祈りには 64 聖詠から「主や、爾が選び近づけし者は福なり、彼らの記憶は世々にあらん」が選ばれています。



### 〔15〕「天より主を讃め揚げよ」成就の歌

ここで主日領聖詞「天より主を讃め揚げよ、至高きに彼を讃め揚げよ」148：1 に注目しましょう。日曜日の聖体礼儀、すべての準備が成就する時、信徒が集まって教会となり、私たちの教会が神の国に上げられて、神と人とが交わる祝いの時、神の救いが完成したことを祝う歌として、まことにふさわしい歌だと思います。

### 〔16〕天地創造とハリストスの救いの歴史

神はそもそも、よきものとしてこの世界をお作りになりました。しかし人間は神の旨に従うよりも、自分の意思に従うことを選び、楽園から追われました。世界と人を愛する神は、独り子を遣わされ、人となった神が、人の罪を担い、十字架で死んで三日目に復活し、私たち人間も古い自分を死んで神とともに復活し、神との交わりを回復することができるようになりました。

### 〔17〕救いの成就

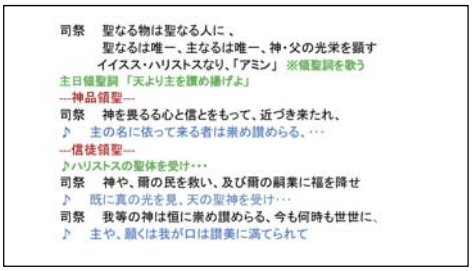
神はこの救いの慶びを体験するために、救いの喜びを分かち合うために、「聖体礼儀」を私たちに与えました。私たちは主の日、日曜日に集まり、祈り、主のお体と血を分かち合います。人が神との交わりを回復すると、全世界が、神の作られた天と地、天使、天体、気象、動物、植物、老若男女すべてが慶び歌います。日本ではまだまだこの領聖詞が注目されていないのは、とても残念なことだと思います。もっと楽しい、喜びがはじけるような歌があってもいいのにと思います。

### 〔18〕　領聖詞の歌い方

そうは言っても、現実的に今あるものでどんな工夫ができるか、具体的に考えてみましょう。12 世紀以前のビザンティンに範を取って、148 聖詠と組み合わせます。

### 〔19〕　領聖の流れ

今行われている流れを確認します。奉事経では「聖なるは独」のやりとりのあと、神品領聖から「領聖詞」を歌うとなっています「天より主を讃め揚げよ」を歌い始め、信徒領聖準備が整うまで歌い続けます。



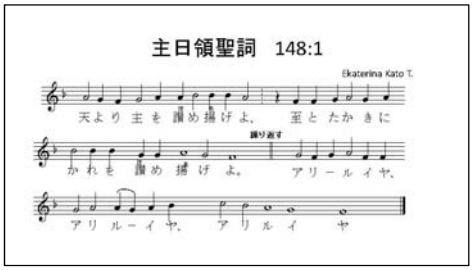
神品領聖が終わって、準備が整うと、王門が開き「神を畏るる心と信とをもって･･･」と「主の名に依って･･･」が歌われ、領聖祝文が読まれます。構造上、神品領聖と信徒の領聖はここで区分されています。

神品も信徒も一体の領聖であることを強調するためには、信徒領聖も同じ「天より主を讃め揚げよ」を続ければよいと思います。あるいは「来なさい」という呼びかけとして、途中から「ハリストスの聖体を受け」に変えることもできると思います。「どこで変えるか」については、どうすれば一体感が保てるか、考えどころだと思います。領聖詞すべてを「ハリストスの聖体を受け」にしてしまうという案もありますが、主日領聖詞の「人が神と和解し、すべての被造物が声を上げて主を讃美する」という 148 聖詠の壮大なイメージは棄てがたいですね。

また、大阪のような大きな教会では、ある程度時間が必要で、同じ歌の繰り返しでは単調になってしまう場合、同じ歌詞「天より主を讃め揚げよ」を異なる音楽で歌うことも一つの案だと思います。

### 〔20〕天より主を讃め揚げよ

さて、歌い方です。大阪で歌われている加藤都也子さん作曲の「天より主を讃め揚げよ」を例に挙げてお話ししましょう。ここでは主旋律だけを書きましたが、四声の楽譜で二人でも三人でも四人でもハモることができます。コロナでなければ、参祷者のみなさんにも入っていただける簡単なメロディです。

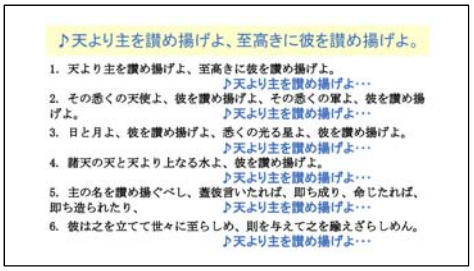



### 〔21、22〕句との組み合わせ、読み方

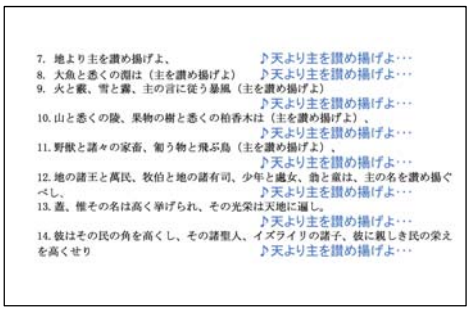
句の部分は交替でまっすぐに読んで、みんなで「天より主を讃め揚げよ」を歌います。こんな感じです。

<<sound　Kinonik148-4voice.mp3

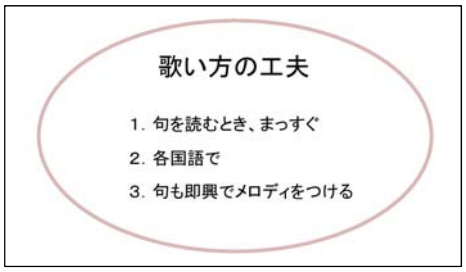
コロナ前は、聖詠の句を大きなカードに作って、参祷者のみなさんのところを回って、それぞれの国のことばで読んでいただいていました。




最近やってみたのが、句の部分を「まっすぐ」ではなく、リフレインのメロディに準じたメロディにのせて唱えるやり方です。たとえば、「その悉くの天使よ、彼を讃め揚げよ、その悉くの軍よ、彼を讃め揚げよ」。最初は字余りになったり、戻れなくなったりして苦戦しましたが、結構楽しんでおられました。メロディの型で歌うという正教聖歌の練習にもなります。




<<sound Kinonik_tzya_stich_melody.mp3



〔24〕

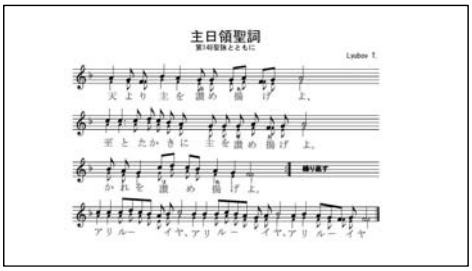
歌い方という点で、テンポもあります。大阪では先ほど聞いていただいたようなテンポ、名古屋教会はこのテンポでした。この日はロシア系アメリカ人のクセニアが英語の句にふしをつけています。

<<Sound 080706-2-06Kinonikon 名古屋 Ksenia

〔26〕田中博子姉の領聖詞

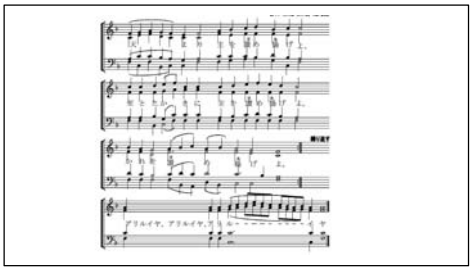
領聖詞の音楽はほかにもいろいろあります。

たとえば、横浜教会の田中博子さんが作られたもので、関東圏の教会で歌われています。<<sound




〔27〕ギリシア系 Nina White

こちらはアメリカのギリシア系教会で歌われていたものを、ニーナ原田さんが日本語にしたもので、横浜教会で歌われていました。<<sound



〔30〕

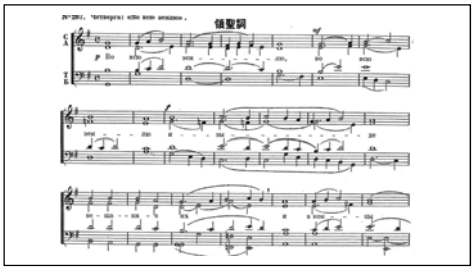
「こんなのもありますよ」ということで、今日はちょっと面白いものを紹介します。主日ではありませんが領聖詞です。みなさん聞いたことのあるメロディだと思います。

<<sound Kinonikon040629DL_Stephen000.wav

〔31〕

モスクワ調のアリルイヤと同じメロディですね。もともとは使徒のポロキメンのメロディです。

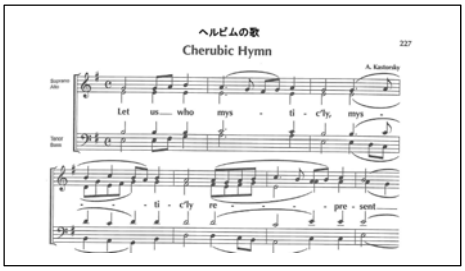
<<sound




〔29〕ヘルビム

こちらは同じメロディを使ってヘルビムの歌です。カスタリスキーの編曲。ヘルビムの場合はゆっくり歌います。この録音は英語ですが、ロシアでもポピュラーだそうです。<<sound StephenCherubim.wav

この日は、ポロキメン、アリルイヤ、ヘルビム、領聖詞が同じメロディをもとにした音楽でした。

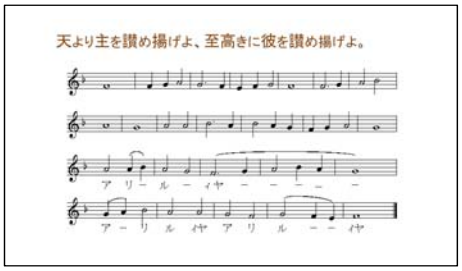


〔32〕

みんなが知っているメロディを使い回す。こういうことは正教会ではよく行われています。私たちは、つい、近代音楽の常識で、どれがオリジナルか、誰の作曲かと思ってしまいがちですが、古いメロディは誰のものでもなく、教会のもの、使い回し自由自在です。

ほかにも、ヘルビムと領聖詞は同じメロディが使われることが多く、リムスキー・コルサコフのヘルビムのメロディ、「われら～奥密にして～」これも古いロシアのメロディですが、むしろ領聖詞として広く歌われています。日本語にして練習中です。

〔34〕



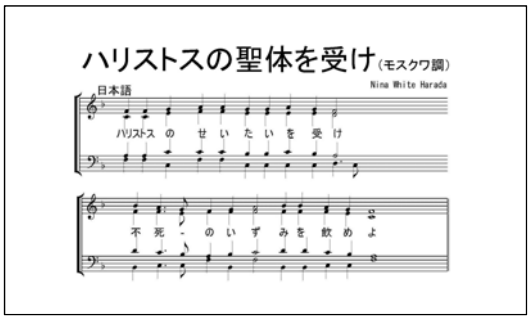

さて、みなさんに課題です。このモスクワ調のアリルイヤのメロディを日本語の主日領聖詞にしてみましょう。主旋律だけへ長調にして書き出してみました。宿題です。四声でもいいですよ。

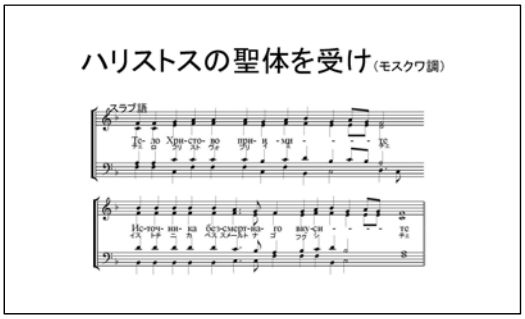
たとえば

<<sound　歌う

〔35-38〕

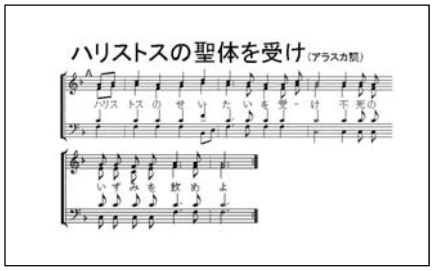
ハリストスの聖体を受け、の方も、いろいろあると思います。昔から歌われている「ハリストスの聖体を受け、不死の泉を飲めよ」やモスクワ調の「ハリストスの聖体を受け、不死の泉を飲めよ」。先ほどお話ししたようにロシアでは、多くの教会で、会衆が歌っていました。コロナが終わったらロシア人たちに歌ってもらうのもいいかもしれません。




そのほかに大阪では英語から訳して、アラスカ調も歌われています。これも楽しいです。

いろいろ変えてみるのもいいと思います。



〔39〕領聖

領聖詞、神品領聖のときにせよ、信徒領聖のときにせよ、「これを歌うもんだ」とか「これを歌っておけばいい」ではなくて、領聖という瞬間の意味、キノニア、すなわち神との和解、一致、交わりの時にふさわしい、喜びあふれる歌を探してみましょう。神と和解するのは、神の救いに預かるのは、教会全体、わたしたち一人一人、です。心を一つに声を一つに祝います。

今日ご紹介した領聖詞の楽譜、ロシアやアメリカのキノニク集、ご希望の方には pdf で差し上げますので、ご連絡ください。

次回、3 月 19 日の奉神礼基礎講座は、のびのびになっていた「正教聖歌の伝統、聖歌のお名前」から「カノン」についてお話しします。